

大阪市中央公会堂

写真は『月刊島民 中之島』122号、2018年9月1日。橋を渡る人の「街事情」マガジン。中之島界わいの情報誌であり、図書館で手にする。大阪市中央公会堂が特集されているので紹介したい。

キーワードでみる中央公会堂。建築としての魅力は、なんとと言っても、そのわかりやすくシンボリックなデザインにある。大アーチ—2本の円柱で縦に3分割。「パラディアンモチーフ」と呼ばれる様式。ステンドグラス—大阪市の市章である「みおつくし」がデザイン化。神像—商業の神・メルキュールと、科学と平和の女神・ミネルバ。ドーム屋根—階段室の上に小さな屋根。赤と白—赤い煉瓦の外壁とその上に白い花崗岩を帯状に回す「辰野式」と呼ばれるデザイン。窓—クラシックな装飾。

中央公会堂はその名の通り、「人が出会う」場所だ。そのため内部の構成は大きさは違えど「集会室」がほとんど。大集会室は1階と2階を合わせると1100席を超える。ずいぶん前に、ここで大きな集會が開かれ、参加したことがある。名古屋鶴舞公園にある名古屋市公会堂を思い浮かべる。

この大阪市中央公会堂の父と言われるのが、北浜の相場師・岩本栄之助である。

「商売が商売だけに、いつ無一文になるかわからない。この際自分は公共事業のために相当のことをしておきたい。全市の一等道路に桜並木を植えたらどうだろう?」。栄之助は、同じく北浜の仲買人だった親友の井上徳三郎に語っていたという。彼の公共事業への関心は、渋沢栄一団長率いる「欧米実業団」への参加を経て具体化する。

アメリカにおける電気ガス事業の発達、富豪による公共事業への出資には特に強い感銘を受けた。帰国後、父の遺産に自らの財産を加えた100万円(現在の数十億円に相当)の寄付を渋沢栄一に相談。その後ろ盾を得て、明治44年(1911)3月、大阪府知事、大阪市長をはじめとした有力者を集め午餐会を開き、初めて寄付の意志を発表した。寄付の使い道には、商業学校の設立や奨学基金の設立などの案も上がったが、亡き父、栄蔵の遺訓「国運発展上に資したし」に最も添う案、一大公会堂の建設に決まった。



(2018年9月6日)